

ハーベスト秋期聖会
「現代のクリスチャンに必要なレンズ（1）」
聖書的世界観—時代をどう見るか—

はじめに

1. この説教を語る理由

- (1) 現代社会の混乱と不確実性
 - ①情報の氾濫
 - ②相対主義の拡大
 - ③偽情報（フェイクニュース）の害悪
- (2) クリスチャンが抱える問題
 - ①内向的信仰
 - ②主観的・心情的信仰
 - ③未信者との関係が断絶した信仰
- (3) 時代に流されないために必要なレンズが3つある。
 - ①「聖書的世界観—世界をどう見るか—」
 - ②「聖書の歴史観—歴史をどう読むか—」
 - ③「聖書のイスラエル論—イスラエルをどう理解するか—」
- (4) 最も激しい霊的戦いは、人間の頭脳の中で行われている。
 - ①それは、どのレンズを採用するかという戦いである。
 - ②創3章でサタンが仕掛けたのは、事実の認知を巡る戦いである。
 - *「本当に神は言われたのか」
 - ③霊的戦いは、教育、メディア、政治領域にも及んでいる。

2. アウトライン

- (1) 聖書的世界観
- (2) 世俗的世界観
- (3) 異端的世界観

結論：今日の信者への適用

3 種類の世界観を対比させることにより、正しい世界観を身に付ける。

I. 聖書的世界観（5 ポイント）

- 1. 神は、唯一の創造主である。

(1) 創 1 : 1

Gen 1:1 はじめに神が天と地を創造された。

- ①この聖句は、聖書的世界観の出発点である。
- ②多神論や無神論とは明確に立場が異なる。
- ③無から有を造り出す創造主が、被造世界を支配しておられる。

(2) 詩 24 : 1

Psa 24:1 地とそこに満ちているもの／世界とその中に住んでいるもの／それは【主】のもの。

- ①この世界は偶然ではなく、目的と秩序をもって造られた。
- ②神は世界の設計者であり、支配者である。

2. 人間は、神のかたちに創造された尊い存在である。

(1) 創 1 : 27

Gen 1:27 神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして人を創造し、男と女に彼らを創造された。

- ①性別・年齢・能力に関係なく、すべての人に尊厳がある。
- ②人間は、他の被造物とは異なり、創造主との交わりに召された存在である。

(2) この聖句は、人間の尊厳・道徳性・関係性・創造性の基盤となる。

- ①無神論者も、この聖句が現代の人権論の出発点であることは否定できない。
- ②この真理が崩れると、自己中心主義・優生思想が広がる。

3. 被造世界は、アダムの墮落の影響を受けている。

(1) ロマ 8 : 20～22

Rom 8:20 被造物が虚無に服したのは、自分の意志からではなく、服従させた方によるものなので、彼らには望みがあるのです。

Rom 8:21 被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由にあずかります。

Rom 8:22 私たちは知っています。被造物のすべては、今に至るまで、ともにうめき、ともに産みの苦しみをしています。

- ①この聖句は、「悪と苦しみの問題」に対する鍵となる。
- ②被造物も嘆き、うめいている。

(2) 現実の世界は、「創造された善」そのものではなく、「墮落した善」である。

- ①呪われた自然界には、「創造された善」の「名残り」がある。

4. 神は、イエス・キリストによる救済計画を持っておられる。

(1) コロ 1：19～20

Col 1:19 なぜなら神は、ご自分の満ち満ちたものをすべて御子のうちに宿らせ、

Col 1:20 その十字架の血によって平和をもたらし、御子によって、御子のために万物を和解させること、すなわち、地にあるものも天にあるものも、御子によって和解させることを良しとしてくださったからです。

①福音は個人の救いのみならず、宇宙的回復の始まりでもある。

(2) 救済史の内容

①創造→墮落→贖い→完成

②救済史の中心にいるのがキリストである。

③福音がもたらす救いは、全世界を新しくするという壮大な物語につながる。

5. 聖書は、「真理の源」として神から与えられたものである。

(1) 2 テモ 3：16

2Ti 3:16 聖書はすべて神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練のために有益です。

①この聖句は、世界観の前提となる情報源の確立に答えを与える。

(2) 聖書観の歪みは、世界観の歪みにつながる。

①聖書を信じない世界観は、結局は人間中心・相対主義に陥る。

II. 世俗的世界観（5 ポイント）

1. 自然主義・無神論に基づいて世界の成り立ちを説明する。

(1) 創造主が存在するという啓示と対立する。

①ロマ 1：20

Rom 1:20 神の、目に見えない性質、すなわち神の永遠の力と神性は、世界が創造されたときから被造物を通して知られ、はっきりと認められるので、彼らに弁解の余地はありません。

(2) 世界の起源に関する土台が対立しているという現実は、非常に本質的である。

①自然主義は、「物質」だけが実在すると考え、神や霊的実在を排除する。

②無神論は、世界には必然的な意味も目的もないと結論づける。

2. 人間は、偶然（進化論）の産物である。

(1) 人間は神のかたちに造られたという理解と対立する。

①進化論的世界観は、人間を「進化の途中段階」と見なす。

②人間の本質的価値や尊厳が揺るがされる。

③命の軽視により、中絶・安楽死・優生思想などが正当化されやすくなる。

3. 性善説に立って、教育や環境の力を信じる。

(1) アダム の 墮落 の 影響 を 認める 立場 と 対立する。

①性善説は「人間は本来善であるが、外的環境によって悪くなる」と見る。

②聖書は「人間の内側に罪がある」と見る（エレ 17：9）。

③聖書は、人間の根本問題は教育では解決できず、「新生」が必要と教える。

4. 世界は進歩し続ける。

(1) イエス・キリストが救済史の中心にいるという教えと対立する。

①世俗的進歩史観：「技術・知識・制度が進歩すれば世界はよくなる」

②聖書的歴史観：「人類は墮落しており、キリストによってのみ回復される」

③技術の発展と霊的退廃が同時進行する現実がある。

* AI と倫理の関係 「できること」と「すべきこと」の区別

* プライバシーの侵害、価値観の強要

5. 真理はすべて相対的なものである。

(1) 聖書は世界観の源であるという啓示と対立する。

①相対主義：「あなたの真理と私の真理がある」

②聖書：「神のことばこそ真理である」（ヨハ 17:17）

③真理があいまいになると、信仰もあいまいになる。

III. 異端的世界観（5 ポイント+1）

1. 万人救済説（ユニバーサリズム）：救済論の歪曲

(1) すべての人は、十字架によってすでに救われている。

①本人が気づいていないだけである。

②また、どの宗教でも結局は救われるということもユニバーサリズムである。

③地獄は存在しないか、無意味である。

④エキュメニカル運動、ポストモダン思想、多文化主義の影響

(2) 聖書との対立点

①イエスは唯一の道であり（ヨハ 14：6）、信じなければ滅びる（ヨハ 3:18）。

②ユニバーサリズムは、恵みと信仰による救いを否定する。

2. 社会福音：人間中心主義

(1) 福音とは、社会の改革（貧困撲滅、人種平等、制度改善など）である。

- ①個人の救いよりも、社会変革が重視される。
- ②19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、リベラル神学の影響で発展した。

(2) 聖書との対立点

- ①福音の本質（救い・新生）を社会運動にすり替え、永遠の視点を喪失。
- ②教会の第一義的使命は、大宣教命令である。
- ③地上の国は過ぎ去り、神の国は主イエスを通して到来する（ヨハ 18：36）。

3. 自己啓発的信仰（ポジティブ・シンキング）：人間中心主義

(1) 人間には、無限の可能性がある。

- ①あなたは、その可能性のほんの一部しか活用していない。
- ②神は、あなたを成功させたいと願っている。
- ③自己啓発運動（ナポレオン・ヒル、ノーマン・V・ピール）の影響あり。

(2) 聖書との対立点

- ①自己肯定の強調により、悔い改めと十字架の必要性が失われる。
- ②人間は、罪に支配されており、自分を救うことはできない（エペ 2：1～3）。

4. 繁栄の神学（プロスペリティ・ゴスペル）：人間中心主義

(1) 信仰があれば、健康・富・成功が与えられる。

- ①苦難や貧困は、信仰の欠如の証拠である。
- ②20 世紀半ばのアメリカで拡大した。
- ③ポジティブ思考とアメリカンドリームに基づく世界観である。

(2) 聖書との対立点

- ①物質主義が信仰の目的になり、福音が自己実現の手段に変質する。
- ②クリスチャンの祝福は、この世の成功ではなく、主との親密な関係である。

5. 神秘主義的信仰（ミスティシズム）：真理源の相対化

(1) 夢・幻・奇跡・感情的体験などは、霊的成熟の証拠である。

- ①過激なペンテコステ運動やニューエイジの影響が入り込んでいる。
- ②客観的な啓示（聖書）を軽視し、主観的な経験を真理の基準に置く。

(2) 聖書との対立点

- ①聖書は、経験ではなく、みことばに基づく信仰を求める（ロマ 10：17）。
- ②「霊」をすべて信じるのではなく、吟味せよと命じている（1 ヨハ 4：1）。

6. その他の世界観

- (1) ポストモダンのキリスト教（反権威主義的霊性）
- (2) ニューエイジ的統合思想（ワンネス）
- (3) グノーシス主義的傾向（特別な啓示や知識を得た者だけが救われる）

結論：現代のクリスチャンへの適用

1. 聖書的世界観の復習

- (1) 神は、唯一の創造主である。
- (2) 人間は、神のかたちに創造された尊い存在である。
- (3) 被造世界は、アダムの堕落の影響を受けている。
- (4) 神は、イエス・キリストによる救済計画を持っておられる。
- (5) 聖書は、「真理の源」として神から与えられたものである。

2. 福音に掛かっている覆い

- (1) 2 コリ 4：3～4

2Co 4:3 それでもなお私たちの福音に覆いが掛かっているとしたら、それは、滅び行く人々に対して覆いが掛かっているということです。

2Co 4:4 彼らの場合は、この世の神が、信じない者たちの思いを暗くし、神のかたちであるキリストの栄光に関わる福音の光を、輝かせないようにしているのです。

- (2) 2 コリ 4：6

2Co 4:6 「闇の中から光が輝き出よ」と言われた神が、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせるために、私たちの心を照らしてくださったのです。

- (3) 2 コリ 3：16

2Co 3:16 しかし、人が主に立ち返るなら、いつでもその覆いは除かれます。

3. 自問自答すべきテーマ

- (1) 私は、何によって「世界の見方」を決めているだろうか。
 - ①聖書か、それ以外のもの（ニュース、SNS、この世の常識）か。
- (2) 私は、何を信仰のゴールにしているだろうか。
 - ①神との関係か、それ以外のもの（成功や快適さ）か。
- (3) 私は、聖書的世界観の具現者となっているだろうか。
 - ①言行一致か、言行不一致か。